

これからが

正念場

「戦争をしない」は国民多数の声



つどいの幕開けを飾った有志によるコーラス。「ねがい」と「Love & Peace」の2曲が歌われました。「ねがい」は2001年広島市立大洲中学校3年生が作ったのが始まりで、2003年毎日新聞で紹介されると、次々と新しい作詞がつぎ足され、今では27か国31の言語に訳され、500番を超える長い曲に発展しています。

また、このコーラスに参加を希望される方は事務局にご連絡ください。

国民一人ひとりが意思表示を

羽曳が丘

憲法九条の会

ニュース

第5号

07年6月 発行

連絡先 林(丘2丁目)

☎956-0596

五月十三日(日)午後羽曳が丘第二集会所で羽曳が丘憲法九条の会第3回のつどいを開きました。有志の皆さんによるコーラスで幕開け、弁護士西晃さんの講演、三人の方の戦争体験と続きました。会場いっぱい参加者からは、改憲の準備があらゆる角度から進められている中で、憲法九条の果たしている重要さがよく分かったとの声が多く寄せられました。

戦争体験

語りつぐのは

被害・加害両方の立場から

世話人福岡甲子郎さん開会あいさつ



戦争の体験談

と言いますと、被害者の立場からのものと加害者の立場からのものの2つがあるかと思えます。日本人としては、被害者の立場からは、例えば被爆体験のように、いろいろ多く語られてきました。しかし、戦争に行った加害者としての体験は語れない、自分の口からは言えない。そのために、日本人

の中からは加害者としての体験談は消えていってしまうだろうと思われまます。その体験は、中国や朝鮮、東南アジアの人たちによって語り継がれていきます。被害者としての立場と加害者としての立場があつたのは事実なので、この被害者と加害者の立場のギャップをうずめていかなければならないと思います。

現在の日本・戦争準備はどこまで進んでいるのか

弁護士 西晃さんのお話から

憲法を変えて日本をどんな国にしようとしているのか

憲法を変えようとしている人たちはどんな人たちが、そして、どんな国にしようとしているのか、をはっきり

させておかなければなりません。

改憲を考えている中心にいる人たちは、右肩上がりの経済成長を考え、いかに金儲けをするかを迫及している人たちです。そのためには、大企業を優先し、アメリカとも一体化してい

くことを考えています。競争に勝つことしか考えていません。弱肉強食が当たり前なのです。こうした考えを持つ人たちが、今、国家権力の中枢にいるわけです。カネの力でマスコミに対する指揮権も握り、国のシステムをつくっていきます。

国民をどう育て、監視して

競争社会を維持するために、例えば教育基本法を変えました。変えた狙いは、100人の生徒がおれば、そのうちの2、3人の超エリート、5〜10人の確かな技術を持ったエリート、その他大勢とし、超エリートを教育するためにいくらかでもカネをかけるが、その他大勢にはカネはかけずその代わりに「国を愛してください・郷土を愛する人に・美しい心を持った人に・他人を思いやる人に」なることを押し付けることにあります。

格差社会も当然なのですが、国民の中から反発が生まれる。それを防ぐために国民の中に相互監視システムや、強力な警察権力が必要になります。梅田の地下街で監視カメラに向かつて「ピース」なんて奇抜な行動を



語りかける
西 晃弁護士

(つづく)

やったら、すぐに係官がやってきます。それぐらい四方八方から監視されています。以前は「防犯カメラ」と言っていました。今は「監視カメラ」です。そして、何か事件があると国民の側から「警察はもっとしっかりと監視せんかっ！」となるのです。

マスコミも、本来は国民の側に立つて権力者に目を光らせる役割を担っているのですが、「あるある大辞典」などから、国民の側も「国はもっとマスコミの報道のあり方を監視せよ」という形になってきています。



講演に聞き入る参加者

戦争はなぜおこる？

カネ儲けは弱肉強食です。例えば、車、今や日本でもヨーロッパでも売れません。そうなると思えば、発展途上国に広がっていきます。石油をはじめとする資源の獲得や安い労働力を求める動きでもそうです。そこには利害をめぐる摩擦が生じます。強い国は力づくで抑え込もうとします。そこから戦争へと発展してしまうことがあるのです。

戦争とカネ儲けは車の両輪

戦争をしたらカネ儲けができる。パトリオットミサイル一発1億5千万円、これは一般サラリーマンの生涯賃金にあたります。P130輸送機は1機125億円、そのコックピットの特等ガラシ1枚が2500万円です。こうした兵器を使えばまた作らなければなりません。戦争ほど大規模な破壊はありません。

戦争することとカネ儲けをするとは車の両輪です。カネ儲けをするために世界に出かける。途中で何か障害が生まれたら戦争する。戦争してまたカネ儲けをする。

アメリカは戦争国家になっている

アメリカは何年か何十年に一度戦争をやらないと国が成り立たないシステムになってしまっている。どこかで戦争して武器を消化する、そして新たに武器を生産する。外に向かって利益の拡大を図るために戦争を繰り返すので

す。日本が公共事業でダムや高速道路を作ってきたように、アメリカでは戦争が公共事業のようになってきているのです。そのアメリカに、「憲法変えて、肩を並べて戦争できるように」と言われて「ハイ」と言おうとしているのです。

憲法9条を生かし、国際平和に貢献できる日本に

そもそも憲法は権力者の手足を縛り、国民の生きる道を守るためのものです。日本国憲法でも個人の尊厳を第一にしています。基本的な人権は原則として法律で制限できないと定めています。だから人権を無視した軍隊は持てないし、徴兵制もつくれないのです。変えようとしている憲法案では、個人の上に公の利益、国の利益、軍の理屈をおこうとしています。そうなれば基本的な人権の尊重はなくなってしまう。この二つの考え方をまともにぶつければ、憲法を守ろうという方が勝てるはず。今は国民が有権者として代表を選ぶのです。これからの国政選挙でどんな代表を選ぶかにかかっています。

右肩上がりの経済成長の迫及は必ず破綻します。それよりも循環型経済で潤う国際社会を目指すべきだと思います。そして、憲法9条を生かし、国際平和に貢献できる日本にしていくべきです。



非国民、国賊と言われるのを恐れて隠れて泣いていた母

(西5丁目 松原さん)



私は瀬戸内の貧しい小さな島に住んでいました。小学校2年生のとき、兄に召集令状が届けられました。夜中トイレにおきたら、母が縁側の隅で泣いていました。朝起きて泣いていま

指でつつけば眼を覚ましそうな小さな子が若いお母さんの背で死んでいった

(西4丁目 松崎さん)



私は長崎県佐世保で昭和十九年、学徒動員で軍直轄の海軍工廠に行きました。朝の7時半から夕方7時まで、休日は第2、第4日曜だけ、昭和二十年3月からは休みは無くなりました。ある日、工場で突然爆撃を受けまし

「欲しがりません、勝つまでは」すべてが戦争に従わされた

(学園前4丁目 世古さん)



私の家は京都室町で呉服屋をしておりました。国家総動員法が作られ、すべてが戦争に従えられるようになりました。「欲しがりません、勝つまでは」「贅沢は敵だ」と言われた時代です。情勢のパーマもダメになりました。こんなざれ歌がはりました。

した。そのときは「何でだろう」ぐらいにしか思いませんでした。

戦争が終わり、母が亡くなったから父と母の思い出話をしたことがありました。「そうか、お前は知っていたのか。」「もし他人に知られたら『非国民、国賊』と言われはしないかと、恐れていたんだ。」「子どもを国に捧げることが辛かったんだということがわかりました。

た。そばにいた一番仲良かった友だちは死んでしまいました。

また、空襲で亡くなった人を芋畑で焼くのに木切れを集めていたとき、指でつつけば眼を覚ましそうな表情の一歳か二歳の子どもが若いお母さんに背負われたまま母子ともに死んでいるのを見つけました。その時、どうしてこんな小さな子が死ななければならぬのかと可哀そうでなりませんでした。

「パーマメントに火がついてみるみるうちにげ頭。あーはずかしい、はずかしい、パーマメントはやめましょー」これを何もわからない子どもに歌わせたのです。

当時、世界で一つしかないような織物を扱っていた父は、「贅沢品は扱わない」という命令一つで仕事ができなくなり、京都郊外に移り、そこで病気で死にました。軍隊には薬はあっても庶民にはなかったのです。